



水場からタイヤのチューブに水を入れて運ぶ遊牧民の女性たち。チューブの容積は約500リットル

「セネガル」

サヘルに生きる 遊牧民の民

写真真 飯塚明夫

乾燥地に住む遊牧民の取材に向かう途中での出来事だった。私の車が道路工事の現場に近づいたとき、案内役の遊牧民パティ・ソウさん(65)が叫んだ。

「俺が今一番欲しいものがあの車だ」

彼の指差す方向を見ると、工事のほこりを抑えるために給水車が水をまいている。家畜のために毎日多大な時間と労力の水くみに費やしているパティさんが思わず発した本音である。

3月のセネガルは厳しい乾期の盛り、目の前には渴いた大地が果てしなく広がる。パティさんの放牧地はセネガルの中央部リンゲール地方にあり、サヘル

地帯に属している。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の資料によると、この地域は過去100年の間に降水量が40〜50%も減少し、1970年代と80年代には深刻な干ばつに襲われている。

夕方、パティさんの家族の住む放牧地に着いた。真っ先に目に飛び込んできたのが、荷車の上の大きな四角いポリタンクだった。物々しく鉄の格子で保護されている。その隣にタイヤのチューブ、そして円筒状のポリタンクが並ぶ。牧歌的な情景をイメージしていたので少し面食らったが、どれも貯水容器として今では遊牧民の必需品だという。3つをすべて満タンに

※各国の研究者・専門家が集まり、人為的な気候変動の影響などについて、科学的、技術的、社会経済学的な見地から包括的な評価を行う政府間の機構。

すると約1800リットル、しかし2日で空になるとパティさんは嘆いた。

彼の家族は、奥さんが2人、子ども7人、長男の嫁と孫1人の計12人家族である。一日は日の出とともに始まる。簡単な朝食の後、約200頭いるヤギや羊を4つのグループに分け、順番に水を飲ませてから放牧に出す。家畜の体調なども考慮してグループ分けを行うのは大変な作業だが、子どもたちの活躍が頼もしい。

「俺たちが牛や羊をたくさん飼うのはお金のためだけじゃない。家畜は遊牧民の誇りだ。牧畜は俺たちの人生そのものだ」とパティさんは胸をはる。

家畜を放牧に出してしまうと、次は水くみだ。パティさんを利用する水場は約5キロ離れた

バルケージという村にあり、この付近では番大きいという。池などの自然の水場はほとんどないので、多くの水場は動力ポンプで水をくみ上げている。ポンプの周りは水を求める遊牧民と家畜で混雑し、木陰も順番を待つ家畜でいっぱいだ。必要な水の量を確保するのに半日かかることもあるそうだ。

動力ポンプが壊れると深い井戸から人力で水をくまなければならぬ。トゥーバ・リンゲール村の村長モウド・ウッドさん(64)は、「村のポンプは半年前に壊れ、町に修理に出したがいまだに何の連絡もない。その間60〜70頭の家畜が水不足のために死んだ」とまゆをひそめる。「給水車が欲しい」というパティさんの叫びが生々しく脳裏によみがえった。



早朝、放牧に出る前に家畜をグループ分けするパティさん一家



パティさんと奥さんのアミナタさんと子どもたち



病気の家畜に抗生物質の注射を打つ



羊の乳を搾る2番目の奥さん、ファティさん



朝食用に昨夜の残り物を温める



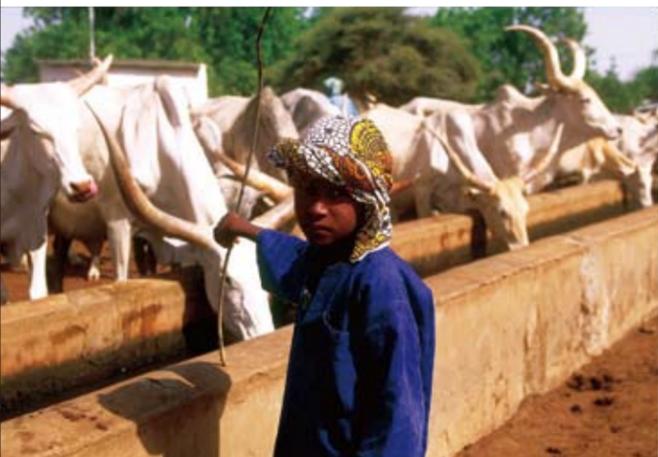
貯水タンク。容積は約1,000リットル



ボッキマサレ村の水場は1984年の大干ばつを期に政府がつくった。7つの村(約4,000人)が共同で利用するという



動力ポンプが故障したので近くの井戸に大勢の人が押し寄せた



7頭の牛を一人で引き連れて水を飲ませに来た少年



トゥンの水場でチューブに水を入れる少女。
満タンにするのに2~3時間かかる



トゥン村にある水場は水の争奪戦が続く。ポンプは村人が資金を出し合って2005年に設置した



タンバクンダ州の地域医療施設で活動する青年海外協力隊員

日本の支援で設立された職業訓練センターで、加工機械の操作を学ぶ訓練生(撮影:今村健志朗)



JICAの活動 in セネガル

貧困を削減し、末永く続く成長を

さまざまな貧困問題を抱えながらも、安定した政治や社会のもとに、地道に発展への努力を続けているセネガル。JICAは貧困の削減と経済成長への支援を通じ、その歩みを後押ししている。

農業、漁業を主要産業とするセネガルでは、都市と地方の格差が拡大し、国民の半数が1日1ドル未満で生活するなど、依然として根深い貧困問題が横たわる。JICAは、①保健・医療や教育などの地方村落の貧困層支援、②インフラ整備、農業・漁業などの産業振興、産業人材育成を通じた持続的な経済成長のための基盤づくりを重点分野に、さまざまな事業を展開している。

基礎保健サービスの不足により、高い妊産婦・乳幼児死亡率など多くの課題を抱える保健・医療分野では、最も貧困の深刻なタンバクンダ州とケドゥグ州で、保健システムを総合的に強化する支援プログラムを2007年に開始。保健アドバイザーや青年海外協力

隊医師・看護師隊員を派遣し、農村の保健・医療サービスの拡充を支援している。今後、無償資金協力による医療施設の整備や、母子保健サービス強化のための技術協力も実施される。

また同地域では、持続的経済成長のためのインフラ整備として、マリとの国境をつなぐ国際道路の建設が06年より円借款で進められており、地域経済の活性化が期待されている。

一方、セネガルは有数のコメ消費国だが、その大半は安くて良質の輸入米に占められ、国産米の消費は総需要量の2割にすぎない。そこでJICAは08年より国産米品質向上アドバイザーを派遣し、国産米振興プログラムの策定を支援している。今後は、JICAが提案した、サハラ以南アフリカのコメ生産量

倍増への取り組み※のもと、国産米が生産されるセネガル川流域を対象に、生産・流通・販売を含む包括的な支援プログラムを本格化し、コメ自給率の向上を図る。

※サハラ以南アフリカ諸国のコメの生産量を10年間で倍増させることを目標とする「アフリカ稲作振興のための共同体(CARD)」。2008年5月の第4回アフリカ開発会議で設立が発表された。



セネガル川流域の水田。今後、国産米の品質と生産性の向上を支援する



カラバッシュ

〒105-0013 東京都港区浜松町2-10-1 浜松町ビルB1
TEL: 03-3433-0884

URL: <http://www.calabash.co.jp/>

ランチ: 11時半~14時(月~金曜日)

ディナー: 18時~23時(月~土曜日)(日曜・祝祭日定休)



特産品のピーナッツを使ったシチューをご飯にかけて「マフェ」、魚や鶏肉をタマネギとレモンのソースで煮込んだ「ヤッサ」などが代表的料理として知られる。
東京・浜松町駅そばにある西アフリカ料理店「カラバッシュ」では、これらのセネガル料理を存分に楽しめる。チエブ・ジェンにサラダとコーヒーがついた1000円のランチセットも人気だ。オーナーは、アフリカ専門の旅行会社「道祖神」の代表、熊澤房弘さん。「アフリカ文化の発信基地に」と2005年に開店した。アフリカ音楽のライブのほか、トークショーや映画を通じてアフリカのことを楽しく学べるイベントも開催している。

世界自然遺産のジュージ国立鳥類保護区には、ペリカンやフラミンゴなど数百万の鳥類が飛来する。



16~19世紀にかけ、奴隷貿易の拠点だったゴレ島。今も残る収容所跡がその悲しい歴史を人々に伝えている。1978年、世界文化遺産指定。



首都: ダカール

面積: 19万7,161km² (日本の約半分)

人口: 1,220万人 (2007年)

公用語: フランス語

宗教: イスラム教95%、キリスト教5%

1人当たり国民総所得 (GNI): 750ドル (06年)

経路: 日本からの直行便はなく、ヨーロッパ経由が一般的。

通貨: CFAフラン (XOF)

1XOF=約0.19円 (09年1月現在)

気候: 熱帯乾燥気候に属し、乾期(11~5月)と雨期(6~10月)に分かれる。雨期は30度前後となり、特に内陸部では40度を超す厳しい暑さの日も少なくない。

20本以上の弦を持つ「コラ」と、木琴「バラフォン」は古くから親しまれてきた民族楽器。



西アフリカの玄関口、商業の中心都市として栄える首都ダカール。



地球ギャラリー vol.06

Senegal

セネガル

Illustration/sugawara maiko

セネガル料理

大鍋で作る家庭の味 「チエブ・ジェン」



アフリカの中でも特に洗練されていると評判のセネガル料理。旅した日本人は「コメ、野菜、魚をたくさん使い、味も優しいので食べやすい」と口をそろえる。周辺国ではセネガル料理を出す店がにぎわい、さらにはニューヨークやパリにも、人気のレストランが多いと聞く。

そんな世界各地で親しまれているセネガル料理の代表が「チエブ・ジェン」だ。白身魚とタマネギ、オクラ、大根などの野菜をトマトソースで煮込み、コメを入れて炊いたもので、魚のだしと野菜のうま味が染み込んだご飯のおいしさは格別。セネガルの家庭ではこれを大鍋で作る、皆で囲んで食べるそう。ほかにも、